

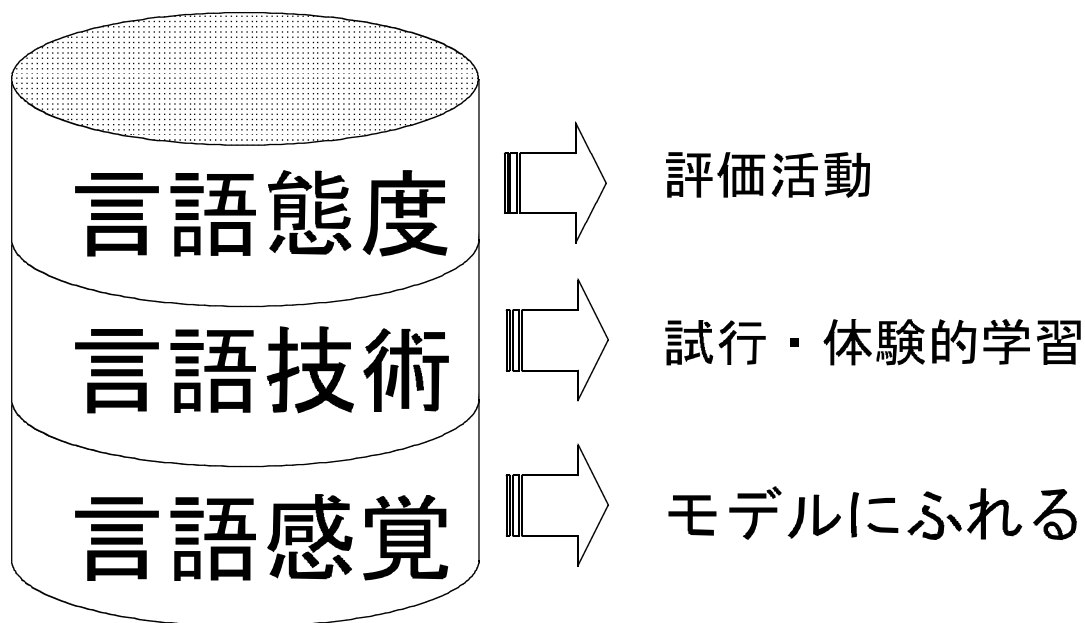
言語感覚を磨く

表現力の要素は、次の3つであると定義しました。

すなわち、言語感覚、言語技術、言語態度です。

これらがどのような機会に高まるのかを、少し書きます。

おそらく次のようなことが言えるでしょう。



言語技術は、周知の通り言語技術を使う学習で定着させることができます。使わずに力はつきません。

言語態度は、評価活動で高めることができます。言語技術を使った経験を振り返り、感じたことや他者からの見え方をフィードバックすることで、コミュニケーションに自信がついたり、意欲的になったりするわけです。

言語技術は、子どもに話をさせてみれば、それらがどの程度定着しているかが分かります。

また、言語態度はその子どもの振り返りを見てみればある程度把握することができます。問題は、言語感覚です。

言語感覚は、それ以外の二つと違い、目に見えません。

言語感覚がどの程度豊かかは、実際のところ中々把握しづらいのです。

でも、把握しづらいからと言って、そこを相手にしなければ、ますます言語感覚の乏しい子どもたちになってしまいます。

ヒントはあります。

感覚を高めるには、モデルにふれさせることがもっとも良い方法であることは、分かっています。

江戸時代の寺子屋では、古典の素読が取り入れられていました。

また、そのモデルには2つあることも想像できます。

すなわち、

人的環境によるモデル

物的環境によるモデル

です。

人的環境として、家庭では家族、学校では担任教師があげられます。

人的環境は、即時にその必要な環境を子どもたちに与えられる反面、一般に計画的に運用することができません。例えば、日常会話がこれに当たります。

一方、物的環境は、ものを用意して時間さえ確保すれば、ある程度計画的に行うことができます。

例えば……

- ・学級文庫を充実させる。 私は古本屋に行って100円均一の児童書を大量に買い込み、学級においていたことがあります。当時、勤務校は、「朝の10分間読書」に取り組んでいたため、その時間に本を活用しました。
- ・読み聞かせタイムをつくる 例えば、国語の時間はじめ5分は、児童文学の読み聞かせをする。全校で取り組むなら、金曜日の中休みは「読み聞かせタイム」と決め、教師や地域ボランティアの方が各教室でいろいろな本を読み聞かせてくれる。子どもは自由に参加する。
- ・始業の挨拶を知的に変えてみる
「気をつけ、礼」を変えてみる。
日直「起立！気をつけ！閑かさや岩にしみいる蝉の声」
全員「閑かさや岩にしみいる蝉の声」
日直「始めます」
全員「始めます」
日直「着席」
これをやると、子どもがどんどん名句を覚えていきます。
週ごとに変えていけば、年間で相当数の句を覚えられます。
- ・折に触れ、定期的に、言語感覚を高めるシステムを作る
天塩小学校でもそういうことをされている先生はいらっしゃいます。例えば、「ことのはタイム」と言って四字熟語を子どもたちに提示する。学級通信で連載する。
その他にも、例えば、月ごとの詩を掲示して暗唱させる等です。

日常の活動を通して、言語感覚を高めるといえるのは、研究の一つの視点であるように思います。